きらめく文武両道の実践

警報発令のため生徒は欠席したが盛会となった式典

和歌山市吹上の県立桐蔭高校（木皮享校長）はことし、1879年の旧制和歌山中学校の開設以来140周年を迎えた。和中・桐蔭同窓会（森下正紀会長）は記念式典を10月12日、県民文化会館で行い、台風19号の到来で荒模様の天気の中、同窓生約400人が心を合わせて絆を深め、新たな歴史を刻むことを誓った。

あいさつする主催者の森下同窓会長

和中桐蔭創立140周年

同校は1948年に旧制和歌山中学校を引き継ぐ形で新制桐蔭高校、2007年に桐蔭中学校を開校した。4月1日現在の生徒数は中学生240人（男子92、女子148人）、高校生828人（男子386、女子442人）で、文武両道の精神を継承し県下有数の伝統校、進学校として教育活動を展開している。その向学の精神は、旧制和歌山中学校で長く教員を務めた漢学者、多紀仁之助が「和中魂」を著して文武両道を説いたことを契機に受け継がれており政治、経済、医療、科学技術、芸術、文化、スポーツの各界に数々の偉人を輩出。桐蔭時代に移っても進路面においては、毎年高い進学実績を誇り、部活動では本年度だけでも中学陸上競技において女子400㍍リレーの全国新記録での優勝や、高校の科学部がイタリアで開催された缶サット世界大会に出場するなど、目覚ましい活躍を示している。

和中・桐蔭のDNAを誇りに

桐蔭中学校・桐蔭高等学校長　木皮　享

140周年記念という本校の歴史の節目を、時の流れの一通過点とするのではなく、さらなる発展と充実を目指し、150周年、さらには200周年に向かう新たな第一歩とするところに、この式典の意義がある。

卒業生には各界の偉人が名を連ねており、その一例は南方熊楠、戦前の中学野球で全国制覇した野球部、ビタミンAの高橋克己博士、野村吉三郎元外務大臣、〝ベルリン五輪・友情のメダル〟の西田修平選手、直木賞作家の津本陽氏ら。諸先輩は困難から逃げ出さず歴史創新を実現した。

近年の本校も新たな社会の到来に備え、設備や学科を再構築。2011年に体育館、17年にグラウンドの改修工事を終了し、同年には中学校の開校10周年を迎えた。令和の時代からは数理科学科の募集を停止しこれまでの教育システムを融合した〝新たな普通科〟を設置。

今後の急激な技術の発展を伴う社会においても和中時代からDNAとして受け継いでいる「文武両道」の下、「自ら人生を切り拓く人を育てる」との教育指針を掲げ、校庭のクスノキの大木のようなスケールの大きな若者を育てる教育活動に取り組みたい。在校生は和中・桐蔭の流れを受け継ぐ生徒であることに誇りを持ってほしい。

桐蔭はよかったなぁ

和歌山県知事　仁坂　吉伸

和中・桐蔭130周年も、140周年も和歌山県知事として迎えることができました。生まれ故郷のために尽くすことが出来ることは有難いことだと思います。この思いを忘れることがないように職務に打ち込んでいます。

教育委員会を見守りながら日夜悩み努力している私からすると、あの日の桐蔭高校は、本当に良かったなぁと思うのです。たくさんの個性あふれる生徒がいて、正しく知識を授けてくれる先生がいて、皆がそれぞれの関心に従ってそれぞれ好きなように自由に高校生活を満喫しながら、それでいて則を超えず。

そこで生徒は、知力を鍛え、好きなことに打ち込みながらこれからの広い世界の中で生きる力を身につけていったのだと思います。さまざまな経験もし、しかも今教育にも責任を有する立場の者として、しみじみそう思います。

桐蔭―自由な校風に感謝

衆議院議員　岸本　周平

図書館の前にあった、「努力！天は自ら助くる者を助く」との野村吉三郎海軍大将の碑が強く記憶に残っています。授業をさぼって図書館で本を読んだり、食堂でうどんを食べたり、自由な校風がなつかしく思い起こされます。

体育祭や文化祭の準備と称して、学校に泊まり込む生徒もたくさんいました。みんな自分の好きなことを勝手にしていました。中学までの管理された教育から、突然大人扱いをされたような感じで、今思うと夢のような時代です。

自由だからこそ、極端に羽目を外すことが無かったのかもしれません。

この素晴らしい学校にご縁を頂いた恩返しは、後輩諸君に自由闊達な和中・桐蔭の伝統を引き継いでもらい、人材として世の中に羽ばたいていただくお手伝いをすることだと思っています。

ひらけゆく未来につなぐ改革と伝統

みずみずしい感性光る

標語の最優秀は平住君

式典実行委員会は140年の歴史の意義を広く知ってもらおうと、標語とポスターの作成を企画。在校生のみずみずしい感性が光る作品がそろった。

標語は公募の中から最優秀賞に高校3年、平住直也君の「ひらけゆく未来につなぐ改革と伝統」、優秀賞に中学2年、藤本恵さんの「新たなる世紀に目覚めて改革と伝統」が選ばれた。ポスターは、美術部の高校3年久保田結香さんが担当し、緑豊かな学園が鮮やかに表現された作品が仕上がった。

平住君は放送部に所属。マイクで話すフレーズを日頃から練っていることが、思いを短文で表現する標語作りに生かされたと感じており「節目の年に在籍できてうれしいです」と話す。テニス部の藤本さんは「楽しく考えた作品が選ばれてびっくりしました」とあどけない表情でにっこり。

久保田さんはずっと変わらないものとして校章を描こうと、桐の葉を女子生徒のスカートに、「中」の縦線を男子生徒に見立てた。そのデザイン力の高さと日頃は油絵を描いているという腕前で、先輩と在校生の絆の感じられる見事な作品が完成し「担当させていただき光栄です」と話している。

ポスターを描いた久保田さん

標語を考案した平住君㊧と藤本さん

見よ若人の眼眸は
唐紅に燃ゆるなり
「北辰斜に」より

桐蔭は勉学に励むだけではなく、学校行事では大いに盛り上がります。体育大会では三つのブロックに分かれ、どのブロックもプライドを懸け、優勝するために一致団結します。このような学校行事を通して学年やクラスの絆は強まり、リーダーとなる自覚が芽生えます。これは、桐蔭の良い伝統であり、この文化がこれまでの桐蔭を支えてきたのではないでしょうか。伝統を支えに、これからの試練や困難を乗り越えていきます。

現役生が高らかにメッセージ

生徒代表　高岸　優希